

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	村田 理沙子
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Changes in Exercise Stress Echocardiographic Parameters before and after Transcatheter Mitral Valve Edge-to-edge Repair （経皮的僧帽弁クリップ術前後の運動負荷心エコー検査指標の変化について）
	掲載誌 Cardiovascular Intervention and Therapeutics 2023; (in press)
	主査 藤谷 博人 副査 松本 直樹 副査 信岡 祐彦
[論文の要旨・価値] 僧帽弁閉鎖不全症(MR)には、弁尖、乳頭筋、等の器質的異常による一次性MRと、左室や左房の拡大または機能不全による二次性MRがある。二次性MRの治療においては、病態により経皮的僧帽弁クリップ術(TEER)が選択されている。一方、安静時は中程度以下のMR重症度であっても、運動時には重症度が悪化し死亡率増加を来す運動誘発性MRの存在が知られている。本研究では、これまで本邦で報告の無い、二次性MR患者に生じた運動誘発性MRに対するTEERの有用性について検討を行った。 対象は、TEER前後に運動負荷心エコーを実施された二次性MR患者15例(平均76歳、男性4例、女性11例)で、評価項目は、1年後の再入院率、および死亡率、またNYHA分類による自覚症状(重症度)、そしてTEER前とTEER3ヵ月後に実施した運動負荷心エコーの各種指標変化とした。 その結果、TEER後1年の心不全による再入院率は13%であり、死亡例は認められなかった。またTEER前後の安静時MR、および運動誘発性MR(最大負荷時)の重症度は共に有意に改善した(p value : 0.0125、0.0001)。TEER前後の心エコーの各種指標には有意差を認めなかった。また1年後の重症度は、TEER前ではⅢ度：93%、Ⅱ度7%、Ⅰ度0%で、TEER後はⅢ度：0%、Ⅱ度：13%、Ⅰ度：87%と明らかな改善が示され(p<0.0001)、これら一連の結果から、運動誘発性MRに対してTEERは有用であることが示された。またこの15例を、心室性二次性MR(4例)と未だ明確な治療指針が確立されていない心房性二次性MR(7例)に分けて検討すると、両者にTEER後の症状改善が認められ心房性二次性MRに対してもTEERは有効な治療法であることが示唆された。	
[審査概要] 審査は主査、副査の他、陪席者2名にて行われた。約20分間のPCによるプレゼンテーションは、動画も含めた大変わかりやすい内容であった。その後の約45分間の質疑応答では、TEERの手技の詳細、心エコー所見に変化が少なかった理由、クリップ後の僧帽弁損傷の経年的損傷リスク、今後の展望、等について質問があったが、申請者は真摯な態度で概ね的確に回答した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は、本研究に関する幅広い知識を持ち、研究遂行能力も十分に備わっており、今後の研究活動にも十分期待が持てるものと判断した。また質疑応答における謙虚で真面目な態度は、学位授与にふさわしい人物であると評価した。英語試験は引用文献の一部の和訳により実施し、十分な語学力があると判断した。	